

氏 名：新 藤 悦 子

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲 第 3 9 号

学位授与年月日：平成 2 2 年 3 月 1 6 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 題 目：外来で治療を受ける進行再発大腸がん患者の語りを通じた  
療養体験

Treatment Experiences of Outpatients with Advanced  
Recurrence of Colorectal Cancer Based on Interviews

論文審査委員：主査 守 田 美奈子

副査 武 井 麻 子

副査 筒 井 真優美

副査 河 口 てる子

副査 鶴 田 恵 子

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 【研究の背景】

がん治療の進歩により、死への不安を抱きながらがんと共に生きる期間が長くなる人々が増えている。特に進行再発大腸がんは、近年抗がん剤による新たな治療が開発され、生存期間の延長が期待されている。このような患者への看護、とくに外来で化学療法を受けながら療養生活を送る患者への看護体制は充分整備されておらず、看護援助のあり方も含め、がん看護にとって重大な課題となっている。

### 【研究目的】

進行再発大腸がんで療養している人の療養体験に寄り添い、繰り返し語りを聞きながら、当事者はどのような体験をしているのか、その体験をいかに意味づけ療養しているのかを明らかにする。

### 【研究方法】

本研究は、定期的なインタビュー法を用いた質的記述的研究である。大学病院の化学療法センターで約 2 年間にわたり定期的なインタビューを行った。研究参加者は、進行再発大腸がんのため外来で化学療法を受けている女性患者 3 名であった。

【倫理的配慮】本研究は、研究施設及び日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した。進行再発大腸がんを患う人々を対象に面接を行うため、対象者の身体及び心理状態に充分配慮して面接を行った。データは個人が特定されないよう匿名化し、個人情報およびプライバシーに配慮した。

### 【研究結果】

研究参加者は 50 代から 60 代の女性 3 名（A さん、B さん、C さん）であった。3 名はいずれも

面接開始の1年半～2ヶ月前から再発がんへの抗がん剤の標準治療を受けていた。

参加者にとって化学療法は「毒を入れられる」、あるいは「被爆」という言葉を用いるほどの過酷な体験であった。がんとともに明るく生きていく手段として抗がん剤治療を意味づけて治療期間を調整する参加者もいたが、治療に強い懐疑心や不安感を抱き抑鬱感情を体験した参加者(Bさん)もいた。Bさんは迷った末「我慢しないで楽しい人生を送る」ために抗がん剤治療を一旦中止した。しかし病状の急激な悪化によって治療中止を「100%悪い」ことだと語り、治療中止によって死が接近することを実感していた。その体験から「気合いを入れて晴れ晴れと治療を受ける」という気持ちに変化した。参加者は治療への脅威を強く感じつつも、同時に生を繋ぐために治療への期待を抱くという強い葛藤を孕む体験をしていた。

また参加者は自分の体調変化や症状といった身体感覚をバロメーターにしながら、それに細心の注意を向け、自己の病状を把握し生活を営むための手がかりを得ようとしていた。参加者たちは医師から説明された内容を再現しながら自分の病状を語ったが、それは不安感を表現すると言うよりもむしろ、冷静に客観的に語られるという特徴があった。

また参加者たちの生活は治療日を軸に組み立てられていた。抗がん剤注入後から3～4日は吐き気や食欲不振などに苦しめられ、日常生活が何もできない上、気力を奪われ寝て過ごすしかないような暗鬱な日々となる。しかし休薬期間は「体がすーっと回復」していた。その間は病気のことを忘れられる期間となる。さらに治療日の前日は、治療後に備えて気持ちを整え水や食料を買い込むなど物心両面の備えが必要であった。このようなスパンを繰り返す生活を送っていた。治療に伴う心身の変化や抗がん剤治療に負けない自分をつくるために、参加者はかなりの集中力をもって「食事に気をつける」「サプリメントを飲む」「歩く」など日々の生活の手立てを考えていた。また抗がん剤治療で傷ついた自分の身体を労り回復させるために、皮膚ケアなどの行為を丁寧に実行していた。さらに身体が安定している期間は、できるだけ普通の生活を送ることに重きをおき旅行などを楽しむようにしていた。

このような生活を営みながらも参加者は治療を巡る心のせめぎ合いや、治療日を軸に変化する心身の苦痛と変化や繰り返しおそってくる気分の浮き沈みなどを体験していた。しかし同時にがんに没頭せず、がんにとらわれなくて明るく楽しく生きようとする努力もしていた。参加者は気持ちをもち立てようと努力しても、エンドレスの治療に向かうとき自分が時々押しつぶされそうになると語った。このような気持ちは家族にも分からないとその孤独感を語り、周囲に頼らず甘えなくて自分でできるだけ対処しようとする中で得られる自己への期待を持ち続けようと努力していたが、同時にそれはつぶれそうになる自分との孤独な「戦い」でもあった。

### 【考察】

参加者は、がんの再発によって抗がん剤治療を継続するかどうかを巡る心のせめぎ合いを体験し、死が間違いなく近くにあるという死の接近感を常に感じていた。山口ら(2005)の研究でも進行再発がん患者は「絶望的な闘い」をしていることが報告されているが、今回の結果では新たに開発された治療法への期待が語られ、死の接近感を感じるがゆえの絶望感を孕みつつも、同時に生への期待をかけた闘いの時期を生きていた。

さらに参加者たちは、抗がん剤が入った身体を「毒性化した身体」と捉え、自分の身体でありながら、本来の自分の身体とは異なるものと認識していた。また治療は「自分らしく動けない身体」へと変えるものであり、その結果として自分らしさに揺らぎが起こっていた。Frank(1995

／2002) は、治療によって自己イメージは変化し、身体—自己の不統一感が起こることを記している。また、病む人の身体—自己は、崩壊の脅威によって支配され、解体させられているとも記している。今回の参加者たちも、治療によって脅かされ、身体—自己が解体させられる危機的な状況におかれていたといえる。参加者たちは死の接近感のなかで、治療を受けたくない気持ちと同時に生きたい自分、医師や家族からの期待に添いたい自分と添えない自分など、抗がん剤治療への脅威と期待というアンビバレントな気持ちを抱いていた。このような治療を巡る葛藤も、自己が引き裂かれ解体させられる危機を孕む体験として理解できる。身体—自己解体の危機のなかで参加者たちは、抗がん剤治療を「自分らしく生きるための手段」として意味づけていた。さらに参加者は、がんを持ちつつも普通の生活を送ることを価値づけ、それに向けて非常な努力をしていた。ひとつひとつの生活行為を積み重ねることで気持ちを整え、そのような生活が積み重なることで、病いと自己をうまく統制しようとしていた。そして自分の生を統制できるという感覚を抱くことで、身体—自己解体の危機を遠ざけようとしていた。しかしそれは常にゆらぎを内包する体験であり、繰り返される身体—自己解体の危機の中で自己の統合性を守るための孤独な闘いであった。

## 論文審査の結果の要旨

本研究は、進行再発大腸がんという難治性のがんを患う患者の療養体験という難しい課題に取り組んだ研究である。このような患者への看護は治療に限界があることから、これまでは緩和ケアや終末期ケアの範疇で捉えられることが多かった。しかし最近では、抗がん剤による治療法が進歩し生存率が高まっていることや、化学療法による治療が外来に移行するなどの要因により、患者の療養体験は大きく変化しつつある。このような時期にある患者への看護、さらには新たな治療法を試みつつもそれに限界を来し緩和ケアへと移行する途上にある患者のケアに関しては、看護のみならずがん医療全体にとって重大な課題となっている。

本研究の対象となる患者は、新たな治療を受けながらもその効果への期待と限界のはざまで揺れ動き、自分の生と死を見つめていかざるを得ないという非常に難しい局面に置かれている人々である。治療法の進歩に伴う新たな課題が現在のがん看護に突きつけられているが、本研究はこのような課題に伴うケアのあり方を検討するうえで、最も重要な当事者の視点からの知見を提供しており、本研究のオリジナリティに繋がるものとして評価できる。

研究者は2年間にわたり対象者と定期的な面接を繰り返すことで、患者の経験世界への接近を試みている。面接は対話という形をとり研究参加者の経験に深く関るよう努力している。また面接は過去の振り返りだけでなく、現在の治療や病状変化、生活上の困難さなどを聞き取るという前向き調査を行い、外来で化学療法を受けながら療養する進行再発がん患者のその都度のリアルな経験を浮き彫りにした。このような研究方法によって、当事者の複雑な心理や生活などの療養体験が詳細にわたりリアルに記述されていると評価された。

本研究では、進行性再発がん患者は、抗がん剤治療やその治療選択にともない身体—自己の解体の危機を経験し、さらに日々の生活を整えることで必死に自己の統合を図ろうと孤独な闘いを

していることを明らかにし、患者理解の枠組みを患者の生の全体性という視点から広げようと試みたことが評価できる。

がん対策基本法の成立以降、患者の療養生活の質向上に向けての対応は看護職のみならず医師や薬剤師なども含むチーム医療の課題ともなっている。自己解体の危機とその統合という視点で再発進行がん患者の生きる姿を描いた本研究成果は、看護学のみならずがん医療全体にとっても重要な示唆を与えるものといえる。

博士学位論文審査専門委員会では、審査の結果、本論文を学位規定第3条により、博士（看護学）の学位論文としてふさわしい水準にあると認め、「合格」と判定した。